ウィリアム・ブースと明治日本の知識人との近接

―『日本之下層社会』誕生の背景―

加賀谷　真澄

はじめに

明治二〇年代から三〇年代にかけて、都市の貧困地区に潜入取材した記事が相次いで新聞紙上に発表され、そこに描き出された下層民社会は、新しいジャンルとしてブームになった。当時数多く発表されたこれらの「貧民もの」作品の中で、代表的な記者・作家として桜田文吾、松原岩五郎、横山源之助が挙げられる。

この三人の中で、桜田文吾の『貧天地飢饑寒窟探検記』（一八九三）が嚆矢的作品とみなされており、それを踏襲したのが、松原岩五郎の『最暗黒之東京』（一八九三）[1]であった。横山源之助の『日本之下層社会』（一八九九）は、取材対象を都市部だけではなく、地方都市にまで拡大し、各階層の労働環境や生活環境を詳細に調べ上げたレポートであり、日本の貧困問題に、労働問題からアプローチした一大調査の書となった。

彼ら三人は、日本の下層ルポルタージュ作家として、桜田文吾を起点とした系譜に連なっている。しかし、彼ら以前に、イギリスにおいて「貧民もの」の隆盛があり、それらの書が日本において広く紹介されていたことや、それが彼らにどれほど影響を与えたかについては、これまでほとんど注目されてこなかった。横山源之助は、「貧民もの」の先駆的作品について、次のように言及している。

> 日本新聞記者桜田文吾氏は、大我居士の名を以て、日本新聞に掲け、後ち蒐めて一冊として、世に出だして、大いに世の注意を惹けり、是れ英国に在りては、ゼネラルブース氏（筆者注：ウィリアム・ブース[2]）の最暗黒之英国（ダーケスト　エングランド）の著の持て囃されたると、今一つは世の不景気に刺激されたる者なるべしと雖も、此種の著述に於ける卒先の功は、実に同氏に帰せざるべからず、次ひて、民友社より松原岩五郎氏（乾坤一布衣）の最暗黒之東京出でゝ、同じく世の喝采を受く[3]。

横山源之助が、桜田文吾と松原岩吾郎を並べ、さらにその先に『最暗黒の英国』

を配置したとき、そこに連なる自分の位置も意識していたはずである。

本論では、ウィリアム・ブースの『最暗黒の英国とその出路』[4]（*In Darkest England and The Way Out*, 一八九〇年刊行。以下、『最暗黒の英国』と表記する）に特に焦点をあて、この書が日本で紹介され、受容された過程をたどることによって、横山源之助の文筆活動の場が、『最暗黒の英国』への高い関心を持つ人々のただ中にあったことを確認する。

イギリスの社会問題に精通していた知識人たちは、社会運動の団体や研究会などの組織を通じて濃密な人間関係のグループを形成しており、このような場を通して横山源之助もまた、先進国の繁栄と裏面を知る機会を得ていたと思われる。横山源之助の『日本之下層社会』とブースの『最暗黒の英国』との接点と影響関係を、横山をとりまく知識人とブースと横山の関係から考察する。

第一節　日本における『最暗黒の英国』受容

ウィリアム・ブースの『最暗黒の英国』は、一八九〇年一〇月、イギリスで刊行されてから一年間で二〇万部まで増刷されるほどの驚異的な売り上げをみせた。また、海外での翻訳は、フランス語、ドイツ語、スウェーデン語でなされ、西欧諸国に広く受け入れられたことを示している[5]。

その内容は、二部から構成されている。第一部は、自力で生活を立て直すことが不可能な貧困層の生活ぶりを記した詳細なレポートと、失業や犯罪に到るまでの要因についての分析からなっている。第二部は、生活困窮者を保護し、再び社会の一員として送り出すための、すでに安定して運営されている保護施設や社会事業を紹介しており、さらに軌道に乗せようとしている国内植民と、最終的な目標である海外植民計画の具体的な提案をしている。

ブースは、救世軍[6]の活動や事業によって、一度転落してしまった人でも、サポートすることによって一般社会の経済システムに戻したり、あるいは救世軍内部に生活の場を提供したりした事例をいくつも挙げている。こうした救世軍の活動の成果は、都市の余剰労働力を、救世軍の管理下にあるロンドンの収容施設や授産所から、郊外の農場へと段階的な訓練を経て移動させ、最終的に海外植民させることが、最も有効な貧困問題解決策であるという、ブースの主張に説得力を持たせる材料となっている。

ブースが募ろうとした救世軍の全事業に必要な額――〇〇万ポンド必要だが、一〇万ポンドあれば始動できるとしている―は、本の出版後、三月もたたないうちに寄付金によって達成された。この事実は、ブースの提案が、現実的に有効性のある

ものとして人々の心を捉えたことを物語っている。

日本での『最暗黒の英国』への関心は、詳らかにされた先進国の陰や、貧困問題への具体的な取り組みという部分に向けられた。近代化への過程で、イギリスと同じように日本においてもまた、都市部に流入した無産階級は貧民街を形成しており、イギリスでの動きは、先行モデルとして注目されたのである。

『最暗黒の英国』についての評判は、日本にもすぐに伝わり、ほとんど間を置かずに新聞・雑誌等で紹介されている。その中で、もっとも早く記事を掲載したのは小崎弘道、植村正久[7]らの『六号雑誌』である。『六号雑誌』は、『最暗黒の英国』がイギリスで出版されてからわずか四ヶ月後に「将軍ブース氏の廃人利用策」（一八九一年二月）というタイトルで四頁にわたって救世軍の活動を紹介している。

この記事は、ブース夫妻が「ロンドンの東部、貧民及び不徳者の巣窟たる地方」[8]で伝道を始めたことが、やがて救世軍の組織へとつながっていった、その長い歴史を紹介しており、その後、本の内容要約と続いている。『六号雑誌』は、キリスト教青年会の機関紙である。『最暗黒の英国』が、イギリスでハクスリーらによって批判された時[9]、これに答えるように各宗派（国教会、会衆派、長老派、メソジスト派、バプテスト派、フレンド派等）が救世軍を支持する声明を発表したということもあり、記事に取り上げたのはキリスト教機関紙として当然と言えるだろう。

『国民之友』もまた、「倫敦窮民救濟現状の一部」（一八九二年の四月号と五月号）という題で、（上）（下）の連載を組んでいる。当時、日本の論壇を代表する知識人たちが執筆陣として名を連ねていた評論雑誌が、『最暗黒の英国』や救世軍の活動を取り上げた影響は大きかったはずである。

とはいえ、この記事は、『最暗黒の英国』やブースではなく、ロンドンの貧民街、イースト・エンドをめぐる歴史や現状に比重が置かれている。（上）では、イースト・エンドについてこれまでペンを執った媒体や人物を、最も早いモーニング・クロニクル（一八四八年）から、年代順に紹介している。その中で、救世軍の活動が目覚しい成果をあげてきたことを評価している。（下）では、研究者や宗教家たちがイースト・エンドの内部に入って、生活環境改善に取り組んできた歴史と、一八九二年現在の労働者たちをめぐる状況に焦点が当てられている。

『国民之友』は、これ以前にも、ロンドンの貧困問題について記事を掲載しているが、この時は、『最暗黒の英国』が巷間の話題となっていたため、それを機に、ロンドンの労働問題、貧困問題を再び取り上げたという印象を受ける。記事の冒頭をみると、イースト・エンドという言葉（あるいは東ロンドンという言葉）が意味するものは、知識人たちの間ですでに一定のイメージとなって定着していたようである。

広闊たる倫敦府内に於て、数歩を移せば商売手代の群中よりして忽ち一種異常の群中に入るの場所あり。彼を去て此に入る、恰も春風喧和の間より突然凛冬の空気に入るが如く、人をして震一慄せしむ。此場所よりして東の方数里、テームス河よりは北の方数里、此間飢餓凍寒とも戦闘に一生を過す者一百余万、朝々何処に働きて何れより一日のパンを得べきかを知らずして安からぬ夢より醒むる者十余万を住ましむ。此を称して倫敦のイースト、エンドと云ふ、其名既に世界の人口に膾炙せり。（下線部は筆者による。）

イースト・エンドは一九世紀の中頃には、すでに世界的に知られる場所になっていた[10]。明治維新から間もない一八七一年、岩倉使節団がロンドンを訪れた時には、ツーリズムの対象になっており、一行のメンバーである木戸孝允が案内されたことを記録に残している[11]。それ以降、二〇年近くの歳月が流れる間にロンドンの貧困問題は日本に知られるようになっていたため、「東ロンドン」や「イースト・エンド」という言葉が想起させるイメージは、一部の知識人の間で共有されるものになっていたと考えられる。

しかし、『最暗黒の英国』が、イギリスの貧困問題を日本に伝えた役割は、これまでのどの出版物よりも大きく、世界を牽引する文明国に、未解決の暗い裏面があることを、一般に強く印象付けることになった。そして、この書が日本で知られたことにより、日本の貧民ルポの誕生へと道筋がつけられたのである。

本題に話を戻すと、複数の新聞・雑誌で『最暗黒の英国』は紹介されていたが、これ以外でも、多くの著名な知識人が、個人的に本を入手したり、外遊先で評判を耳にして購入したりしていたことに留意しておきたい。

山室軍平[12]は、『私の青年時代』（一九二九）で、はじめて『最暗黒の英国』に触れた時のことを回想している。それによると、石井十次[13]の友人が「此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する」と言って、アメリカから石井に『最暗黒の英国』を贈ったという。後に、石井が訳読を依頼した学生の傍らで、山室は聞き書きを作ったという。この出来事は、一八九二年のことである。山室にとって、この時が救世軍について知った初めての機会であった。山室は、この後、一八九六年に救世軍に入隊し、日本人としてはじめての士官となっている。

この他、片山潜[14]も一八九四年にイギリスへ渡り、救世軍の活動を視察している。「予も無論社会改良には非常の趣味を持っていたから、救世軍の社会事業には、興味を持って視察した」[15]と述べているように、片山は、この後キングスレー館を設立し（一八九七年三月）、労働組合期成会の創設（一八九七年七月）に参与していることからも、日本で労働・社会改良運動に取り掛かるため、下準備としての視察

だった可能性がある。

片山はまた、「予は兼ねてブースの書を研究し又英国の労働問題を研究して行ったのだから、非常なる趣味を以て実地の視察をした」[16]と言っていることから、おそらく、同書が出版されるとすぐに入手し、十分に研究した上での渡航だったのだろう。

片山と同じ時期に、阿部磯雄[17]もまた、イギリスに渡っている。安部は、救世軍の施設や事業を見学し、ロンドン近くの救世軍国内植民地にも足を運んでいる。安部は、「植民地に於ては、農業牧畜に関する知識と経験とを積み、更に人格の修養も相当に出来たということになれば、救世軍は加奈陀、豪州、南阿等の植民地と連絡を取って居るから、本人の希望とあれば、旅費をも貸与して彼を海外地に送るのである」[18]と述べており、ブースが最終目標に掲げる海外植民に到るまでの、各準備段階を、自分の目で見てきたことになる。

このように、日本では多くの知識人が『最暗黒の英国』を通じて救世軍の活動とブースの計画を知り、大きな関心を持って見ていたのである。『最暗黒の英国』の完訳本が出版されたのは、一九八七年のことである[19]。日本語でまだ翻訳されていなかった時期に、多くの知識人が、ブースや救世軍の情報を求め、それが新聞・雑誌を通じて一般に広まったことは、『最暗黒の英国』の影響力の大きさを示すものであろう。

第二節　横山の交友関係から―片山潜、徳富蘇峰、山室軍平らとのつながり

一八九五年、救世軍が初来日し、日本支部が創設された。この時、毎日新聞に入社して二年目の記者であった横山源之助は、神田の基督教青年会館で開かれた救世軍の集会を取材している。記事からは、横山源之助が、救世軍に対する評価をまだ留保しているのがわかる。その後、横山源之助が多方面で活躍するにつれ、明治の知識人たちとの間に交友関係が結ばれ、それを通してブースと『最暗黒の英国』に対する理解が深まっていくと思われるが、まだこの時点では救世軍に抱いた違和感のために、どのように記事にするべきか迷いが表れている。

次に引用する記事は、救世軍日本支部創設の命を受けてやってきた一行のリーダー、ライト大佐の演説について書かれたものである。

> 来れり、数年前よりゼネラルブースの名を耳にし居たりしが今やライト氏一団を先鋒として爰に我日本の社会に対ひ専ら憐れなる者の霊を救はんとして入り来れり（中略）其の言（ライト大佐の言）の或いは膨張に失し誇大に流るゝも

のあるや、あらずやは余爰に之を曰はず、救世軍なるもの果して我日本の国情と合ひ国風と合し貧民に対して真個に喜す可き良友なりと謂ふを得べきや否やも余は之を曰はず、而して目的に於て美ならば其方法の如何を問はじ、其の国の格風如何を論ぜず斟酌なく遠慮なく異様の手段を取ることの国家の上より見て果して其論旨の正鵠を得るものありとすべきや否やも今ま爰に曰はざるべし、兎に角救世主の先鋒大佐ライト氏の述べたるもの実に斯くの如きものなりしなり[20]。

この夜壇上に現れたのは、和服に身を包んだ「異風の男女一二人」[21]であった。会場は、西洋人の不自然な和装姿を見て、「拍手の響きと共にどよめく笑ひの声は更に劇しく聞こえぬ」[22]と笑いを隠しきれず、しかも、救世軍はその特徴である、にぎやかな楽隊の演奏付きで賛美歌を披露したため、「坐を乱して共に起つて舞はしめ、喧たり、囂たり」[23]する隊員を見た聴衆たちは、「聞く者唖然として失笑し、相顧みて腹を抱かしむ」[24]と、異様で滑稽なものを見たと思ったようである。

新聞各紙は、救世軍の来日を、大きなニュースとして注目していた。しかし、救世軍がイースト・エンドで貧民の間に入り、貧民の隣人として救済活動を実践しているのと同様に、日本において日本人の中に入り込む―「日本人をして日本を救わしめよ」[25]―という標語をもって、西洋人が日本流の服装や名前をつけたり、楽隊付きの礼拝を披露したりしたため、これを否定的に捉えた新聞もあった。『日本』は、救世軍について、冷笑的に書いている。

救世軍は太鼓を叩き、喇叭を吹き、御題目を唱ふるなど、恰も我国の日蓮講中に似たるものあり。或人之を評して、西洋法華と云ひたるは最も適当の命名なりと思はる[26]。

横山源之助が、『最暗黒の英国』の高い評判をすでに耳にしていても、実際に目の前にした救世軍に対して評価を留保したのは、このあたりに原因があったのだろう。

救世軍の第一陣の来日に伴う報道は、賛否両面あったが、八年後に救世軍の創始者であるウィリアム・ブース本人が来日すると、全く異なる展開をみせた。

一九〇七年、ウィリアム・ブース本人が来日を果たした。四〇日近くの滞在の間に、東京、宇都宮、仙台、横浜、名古屋、大阪、京都、神戸、岡山へ歴訪しており、その間、数多くの政財界の著名人と会合を持っている。ブースの到着時、新橋停車場では歓迎アーチが作られ、二万人もの人が迎えたというほどの歓迎ぶりであった

という[27]。

これより数日後に開かれた歓迎会では、東京市長を務めていた尾崎行雄が歓迎の辞を述べ、男爵渋沢栄一と伯爵大隈重信がスピーチを述べている。この時に撮影された記念写真をみると[28]、当時の日本を代表する、そうそうたる顔ぶれを確認することができる。最前列には、島田三郎、森村市左衛門、阪谷芳郎、大隈重信、ブース本人、大山巌、尾崎行雄、渋沢栄一[29]が並んで座っている。

ブースのレセプションに出席して撮影された人々のうち、横山源之助のキャリア上、重要な二名の人物が写っている。まず一人目だが、横山源之助を記者として雇い入れた毎日新聞社の主宰者、島田三郎である。島田は、後に『日本之下層社会』の序文を書いており、文筆家のキャリアという点では、横山源之助を初めて世に出し、その後も後ろ盾となってくれた人物であった。

次に大隈重信だが、横山源之助が後年、取材対象を労働・貧困問題から植民問題へと移したとき、経済的な面で支援している。横山源之助は、大隈重信の後援を得て、ブラジルへ視察調査に行くことができた。横山源之助はブラジルから、「大隈老伯に寄せて伯国移の現状を報ずる書」と題した報告書を送っている。これは『新日本』の記事として掲載されている[30]。

ブースの来日時に話を戻すと、歓迎レセプションのあと、ブースは、当時の首相の西園寺公望と会い、明治天皇にも拝謁した。まさに日本を挙げての熱烈歓迎ムードであったと言えるだろう。わずか八年前、ブースが送り込んだライト大佐の先遣隊が、新聞で冷笑されたことがあったことを考えると、この日本側の対応は、一八〇度の転換である。ライト大佐からブースの来日までの間に、どのような変化があったのだろうか。

ブースの歓迎レセプションの日、大隈重信は、次のように所感を語っている。

一、余は将軍を我同盟国たる英国の偉人として歓迎する。
二、近世に於る救世軍の<u>宗教的・社会的運動</u>は、世界に偉大なる影響を与へる者にて、其の功績の赫灼たる、実に賛美すべき者がある。故に余は将軍を<u>社会の救世主</u>として歓迎する。
三、現時の物質的進歩は、総てに於て生存競争の度を増し、猛烈なる勢を以て、弱肉強食の余弊を伴随し来り、<u>日本も其の競争の渦中に投ぜむとする傾向あり</u>。弱者が困難を訴ふるの度は日増に加はらんとして居る。それ故、此際、此偉人を迎ふるは余の尤も歓ぶ所である[31]。（下線部は筆者による。）

ライト大佐の時には、新聞・雑誌がキリスト教団体としての面に焦点を当てて批

評していたのが、ブース来日時には、人々はブースを、宗教家としてよりも、社会運動家としてみていたことがわかる。ブースは、社会事業者、あるいは社会改革者として注目され、日本の貧困問題を憂える人々から、自国の課題に示唆を与えてくれる存在として受け入れられたのだ。

このようなブースに対する世間の評価や、そして島田三郎、大隈重信が、日本国代表の側としてブースを歓迎する立場であったことは、横山源之助のブースに対する認識に少なからぬ影響を与えたであろう。

このほか、ブースとその著書になんらかの接点を持った知識人と横山源之助との関係をみてみよう。第一節で、ブースと『最暗黒の英国』を日本に紹介したメディアや、個人的に『最暗黒の英国』を入手したり、ブースと接点を持ったりした知識人について述べたが、彼らと横山源之助の関係はどのようなものだったのだろうか。

ここで、『最暗黒の英国』出版後、同書を研究した上で、視察のためにイギリスへ渡った片山潜や、石井十次とともに、個人的に同書を知る機会に恵まれ、救世軍に入隊した山室軍平、そしてロンドンの貧困問題の記事を複数回掲載し、その中で、ブースの活動を取り上げた『国民之友』主宰者、徳富蘇峰について述べておきたい。彼らと横山源之助との関係は個人的なものから仕事や社会活動を通じたものまでに及ぶ、多面的なものだった。

片山潜は、一八九七年七月に労働組合期成会が結成した際の中心メンバーであった。横山源之助も、間もなくこれに加わり、機関紙『労働世界』にほとんど毎号寄稿している。横山源之助の研究者、立花雄一氏は、横山源之助と片山潜のつながりは、表面に見える以上に深いものであったと指摘している[32]。

労働組合期成会結成後、片山潜は『労働者之良友喇撒伝』を刊行した（一八九七年一一月）が、横山源之助は、その『序』を書いている。この時期、横山源之助は、『日本之下層社会』の完成に向けて、日本各地を回って取材していた。また、その間も、労働問題・貧困問題の記事を様々な媒体に寄稿しており、記者としての名声が確立されていった時であった。片山潜にとっての横山源之助は、社会を鋭く分析する文筆家として、ぜひとも労働運動に引き入れたい、魅力ある存在となっていたはずである。

山室軍平については、横山源之助との出会いの場は、貧民研究会であったようだ。『労働世界』の記事によると、貧民研究会は、一八九八年、片山潜と横山源之助によって設立されたとある[33]。短命の会に終わってしまうのだが、初回から参加していたのは、高野房太郎や植松考昭、そして当時万朝方記者であった幸徳秋水も顔を揃えていた。そして、横山源之助が文筆家として世に出る前からの友人松原岩吾郎も出席していたことを、のちに横山源之助自身が記している[34]。

そして、この会には山室軍平も参加していた。のちに横山源之助が『労働世界』に、山室軍平の『平民の福音』の書評を載せていることから、二人は貧民研究会で知り合い、交流を深めていったと思われる。

最後に『国民之友』の主宰者、徳富蘇峰と横山源之助との関係について触れておきたい。横山源之助が『毎日新聞』の記者であったのは、最初の一、二年だけで、あとは拘束されない社友という身分として活動していたようである。一八九〇年頃からは、『国民之友』への寄稿が増えてくるが、これは松原岩吾郎が民友社にいたため、紹介の労を取ってくれたものらしい[35]。

横山源之助が徳富蘇峰に会ったときのことは、『人物印象記』に書かれている。用件は仕事上のものだったため、個人的に親しくなったというわけではなかった。しかし、「今に此の人たち（三宅雪嶺、坪内逍遥、徳富蘇峰、竹越三叉らと初めて会った時のことを振り返って）の文章や人格に影響を受けてゐる」[36]と認めている。

横山源之助と、当時の活躍していた著名な知識人の交友範囲は、様々な局面で、私的・公的レベルで、縦横に交差していたのである。どれほど密接な人間関係の中で当時の知識人たちが生きていたかが伺われる。そして、ロンドンの貧困問題や、研究書など、イギリスの情報を積極的に摂取しようとしていた知識人たちとの交際は、横山源之助の中に『日本之下層社会』を生み出す土壌を作っていったのである。

第三節　松原岩吾郎、スタンレー、横山源之助の関係

ここまで見てきたように、横山源之助の周囲には、イギリスの貧困問題や、社会事業に目を向けながら日本国内で様々に活動していた知識人たちが多く、そのような環境で、横山源之助は、ブースの活動や『最暗黒の英国』を自分なりに消化していったものと思われる。第三節では、横山源之助と最も関係が深かった人物のうち、松原岩吾郎を中心に、松原とブース、そして横山源之助の関係について考察したい。

松原岩吾郎は、横山源之助が文筆家として世に出る前からの友人であり、公私にわたって生涯横山源之助を支え続けた人物である。松原の『最暗黒の東京』のタイトルが、『最暗黒の英国』にならってつけられたことや、横山源之助への松原の影響力という点からも、松原の存在は重要である。

松原岩吾郎の『最暗黒之東京』が、『最暗黒の英国』を意識したものであることは、出版された時期や、貧民街の日常を抽出する手法からも当然予想されるものである。前田愛は、松原が『最暗黒の英国』との記事を掲載した『国民之友』の出版社である民友社に籍を置いていたことから、二つの作品の関係を、次のように結んでみせている。

松原岩吾郎がこのブースの著作を通読していたかどうかをたしかめる資料はないが、民友社の客員としての彼がその内容を承知していたことは当然考えられる。何よりも『最暗黒の東京』というタイトル自体が、ブースからのヒントを推測させるのだ[37]。

ブースが描いた、イギリスの「暗黒」—悲惨な状態で生きる貧民の暮らし—そのイメージを、松原は、そのまま東京の下層社会に重ねることによって、それまで都会の一空間に過ぎなかった地域を焦点化した。ブースが『最暗黒の英国』で、貧民の暮らしを克明に記録したのは、その後に続いて展開される救済事業の必要性を訴えるためであったが、松原の描写は、都会の経済システムの中心から下層に押し出された人々のコミュニティの悲惨さを映し出し、センセーショナルに他者化するものだった。

ブースが用いた暗黒イメージのオリジナルは、『最暗黒の英国』よりほんの数ヶ月前に出版され、世界的なベストセラーになったH.M.スタンレーの『最暗黒のアフリカ』に由来する。ブースが“As there is a darkest Africa is there not also a darkest England?”[38]と問いかけているように、『最暗黒の英国』の第一章は、スタンレーが描いたアフリカとイギリスの貧民のアナロジーに満ちている。

スタンレー隊が入った森は、瘴気に満ち、食人種に襲われる危険と隣り合わせの危険な森だった。その暗闇は果てしなく続くように思われるものだったが、スタンレー隊が最後には脱出できたのと同じように、イギリスの貧困層も光明を見出せるとしてブースは説く。スタンレーの『最暗黒のアフリカ』は、ブースにとって、一般の人々の関心を貧困問題にひきつけ、視覚的にイメージさせるための装置であった。

松原が、『最暗黒の英国』だけでなく、スタンレーの『最暗黒のアフリカ』からもヒントを得ていたであろうと予想されるが、これについて、前田は、『最暗黒の東京』の連載期間と、『最暗黒のアフリカ』が出版された時期をつき合わせ、次のように考察している。

松原岩吾郎の『最暗黒の東京』は、単行本の出版に先立って、その原型に当たるものが「国民新聞」紙上に断続的に掲載された。明治二十五年十一月から翌年の八月にかけてである。この連載期間中にスタンレイの『最暗黒のアフリカ』が『闇黒亜非利加』というタイトルで博文館から出版される（中略）さきに言ったように松原がブースの著作に接していたかどうかは確定できないが、スタンレイについては『最暗黒の東京』のなかに言及があり、それは東京の貧民窟

が探検者を待ちうけている未知の世界として松原の眼に見えていたことを暗示している[39]。

松原がスタンレーに言及している文とは、どのような内容だろうか。

座して喰えば山をも空し、一句これ老婆的慣用語にして業已に陳腐に属したるものなれども、その事実なる事はなおスタンレーが蛮国探検と共に一大事実たるを失わず[40]。

この文に、特にスタンレーの名前を出す必要性はなさそうだが、時節柄、その名が世界的なものになっていたため、触れてみたというところであろうか。

松原が、スタンレーやブースの著書のイメージに頼ったことは、状況から推測していくしかないが、この他にも松原が、ロンドンの貧民街に関心を持ち、彼らの生活を「暗黒」と言っている文も存在しており、『最暗黒の英国』を意識していたであろうことを感じさせる。

某年某月、日、記者友人数名と会餐す、談、たまたま<u>龍動府の乞食</u>に及ぶ。彼らが左手に麺麭を攫みて食いつつ右手に空拳を握ッて富豪を倒さんとするの気色は、いかに世界の奇観なるよ（中略）必らずそこに甚だしき生活の<u>暗黒</u>なかるべからずと[41]。（下線部は筆者による。）

松原は、ブースの『最暗黒の英国』からはその手法―下層社会の生活の詳細な描写―を受け継ぎ、スタンレーからは暗黒と文明の対置―アフリカ人と西欧世界との対照―を受け継ぎ、それを東京に置き換えた。

『最暗黒の東京』では、下層民は他者化され、「暗黒」界に住む人々は、「怪人種」という言葉で表現された。松原は、スタンレーが立ったのと同じ文明人側に、身を置き、暗黒（野蛮）のアフリカ人側に下層民を置いてみせたのである。

このように、横山源之助と最も近い関係の松原が、スタンレーやブースの著書から受けていた影響を考えると、ブースやスタンレーと横山源之助の距離も、どれほど近いものかが推測されよう。

スタンレーと横山源之助について言えば、一九一二年に横山源之助が南米に視察旅行した際に、『大阪朝日新聞』へ送った通信文中でスタンレーに言及している箇所がある。それの文は、横山源之助が南アフリカのナタルに寄港した時、近代的な発展を遂げた南アフリカに在留日本人の少ないことを嘆じたものだった。

南阿戦争後は、一時ケープタウンにも、ナタルにも、二十余名の日本人が或は濠洲より或は印度より、或は紐育より馳せ集まつた。が目今人数減じて、ケープタウンに四名、ダーバンに三名、総計七人丈けである。スタンレー氏の暗黒時代は知らず、殆ど世界の集注点となってゐる。当今の光明阿弗利加に、たつた七名の日本人のみとは、呆気ない[42]。

この通信文は、スタンレーの『最暗黒のアフリカ』が出版されてから、二〇年以上も後に書かれたものであるが、南アフリカの大都会を見て、横山源之助は、自分の記憶にあるスタンレーのアフリカ描写と引き比べているのがわかる。

横山源之助が発表した記事や書籍の中で、スタンレーに触れているのは、筆者が調べた限りでは、この一度のみである。そして、ブースに関しては、救世軍の取材記事を書いたり、日本の貧困問題を論じたりした際に、その名が数回登場しているものの、横山源之助が『日本之下層社会』を執筆した際、『最暗黒の英国』をどのように認識していたかについての記述はない。

しかし、これまでみてきたように、横山源之助の友人や、仕事上の付き合いのある人々は、『最暗黒の英国』に大きな関心を持っていた。そのような環境の中で生きていた横山源之助とブースには、間接的な接点があったと言える。横山源之助が、貧困問題へと向かって行った動機の一つに、ブースと『最暗黒の英国』があったことは明らかである。

横山源之助の『日本之下層社会』の源泉には、松原岩吾郎の『最暗黒の東京』と同様に、ブースの『最暗黒の英国』があり、さらに言えば、その先には、スタンレーの『最暗黒のアフリカ』があったのである。

おわりに

ウィリアム・ブースと横山源之助の関係を探ったとき、そこに見えてきたのは、明治の知識人たちの密接な関係だった。彼らは、様々な研究会や団体で知り合い、人間関係を結んでいた。彼らは、先進国の社会問題に敏感であり、また、その知識をもって国内の社会問題へ向かおうとする共通した姿勢があった。そして、それは『最暗黒の英国』への関心という形で表れたのである。

横山源之助と、当時活躍していた著名な知識人の交友範囲は、様々な局面において私的・公的レベルで縦横に交差していた。そのような状況からみて、横山源之助は、ウィリアム・ブースから影響を受けた知識人の一人であることは間違いない。

明治初頭、ロンドンの貧困問題は、すでに一部の知識人に知られていた。しかし、

それが一般に広く知られるようになったのは、『最暗黒の英国』以降である。横山源之助の『日本之下層社会』が世に出た背景には、このような社会的状況があったのである。

注

＊ 注 7、12、13、14、17、29の人物解説については、正確を期すために講談社『日本人名大辞典』を参考にした。この他、注9のハクスリーについては三省堂『コンサイス外国人名事典』を、注2、6は、岩波書店『キリスト教辞典』を参考にした。

1 『貧天地飢饑寒窟探検記』が新聞『日本』に掲載されたのは一八九〇年。『最暗黒の東京』は『国民新聞』に一八九二年、連載された。

2 William Booth（ウィリアム・ブース、一八二九～一九一二）。救世軍の創始者。メソジストの信徒としてロンドンの貧困地区で伝道活動をするが、一八六一年に〈キリスト教伝道会〉を組織、一八七八年には〈救世軍〉と改称する。救世軍（注6参照）は軍隊の組織形態を模していたため、ブースの肩書きは、大将を意味するgeneralであった。当時の日本では、そのまま採用され、ゼネラルブースの名で紹介された。

3 『横山源之助全集』第四巻、法政大学出版局、二〇〇六年、一四五頁。

4 本論では、*In Darkest England and the Way Out*の日本語タイトルを、山室武甫にならい、『最暗黒の英国とその出路』とした。注19参照。

5 ウィリアム・ブース『最暗黒の英国とその出路』（山室武甫訳）、相川書房、一八九七年、四〇三頁。

6 救世軍（Salvation Army）は、ブースが創始した軍隊組織の教派。貧しい人々への伝道と救済が重点化され、簡易宿泊施設の運営や、貧しい人々のための支援事業などが展開された。本では、一八九五年に伝道が開始された。注2参照。

7 小崎弘道（一八五六～一九三八）は宗教家・牧師。新島襄の後、同志社校長となる。日本キリスト教会同盟会長を務めた。植村正久（一八五八～一九二五）は牧師・神学者。富士見町教会創設者。小崎と植村は一八八〇年、東京基督教青年会を創立し、また『六合雑誌』を創刊した。植村はこの他、『福音週報』、『日本評論』も創刊した。

8 第一二二号。三九頁～四二頁。

9 ハクスリーとは、Thomas Henry Huxley（一八二五～一八九五）のこと。イギリスの生物学者。ダーウィンの友人で、自然淘汰説の普及に努めた。生物学のみならず、神学、倫理学、哲学政治にも通じ、科学、教育面など多方面にわたって活躍した。ロイヤル・ソサエテイの会長を務めた。*In Darkest England and the Way Out*については、一八

九〇年から一八九一年まで、ロンドン・タイムズで批判記事を寄稿した。救世軍の活動を偽装した社会主義と呼び、ブースを詐欺師と決めつけるなど、その内容は痛烈である（*Social Disease and Worse Remedies*）。

10 Henry Mayhewの*Punch*の記事や、Paul Gustave Dorの画は、イースト・エンドの住人の暮らしを西欧世界に伝えた。

11 『木戸孝允日記』第二、早川良吉印刷、一九三三年。

12 一八九五年に救世軍日本支部入隊、一九二六年、日本人初の司令官となる。廃娼運動を開始した他、職業紹介、児童保護、結核療養所建設など、数々の社会事業に尽くした。

13 一八八〇年、岡山市に孤児教育会（岡山孤児院）を設立。一八八九年に山室軍平が訪れ、寄付をしたことがきっかけとなり、二人の交友が始まった。

14 一八九六年、アメリカ留学から一三年振りに帰国、神田にキングスレー館を開いた。そこでは付近住民の教化・教育を目的とし、研究会や集会などが開かれた。社会民主党の結成に参加、社会党入党、のちに日本共産党の結成を指導。

15 片山潜『自伝』、岩波書店、一九五四年、一八一頁。

16 前掲書、一八二頁。

17 キリスト教社会主義を唱える。のちに社民主党、日本フェビアン協会を創立。石井十次の岡山孤児院に協力している。

18 阿部磯雄『社会主義者となるまで』、明善社、二三一頁。

19 山室武甫は『最暗黒の英国とその出路』の翻訳を、一九八〇年に完成させていた。岡田藤太郎監修で相川書房から出版されたのは、一九八七年。

20 『横山源之助全集』第一巻、社会思想社、二〇〇一年、一一三頁～一一九頁。

21 前掲書、一一四頁。

22 前掲書、一一四頁。

23 前掲書、一一五頁。

24 前掲書、一一五頁。

25 三吉明『山室軍平』、吉川弘文館、一九九五年、八九頁。

26 一八九五年（明治二八年）九月九日。

27 三吉明『山室軍平』、一八二頁～一八三頁。

28 前掲書、一八三頁。

29 最前列に並んだ人物の肩書きを簡単に確認しておく。島田三郎、毎日新聞社（前身は東京横浜毎日新聞社）社長。森村市左衛門、日本陶器（ノリタケ）、森村銀行の創立者。阪谷芳郎、第一次西園寺内閣蔵相、東京市長、貴族院議員を歴任。大隈重信、伊藤、黒田内閣の外相を務めたのち、初の政党内閣を組織。ブースの来日後の一九一四年、

再び首相となる。ブース本人。大山巌、陸軍卿、陸軍相を歴任。一九一四年の大隈内閣では、内大臣となる。尾崎行雄、写真撮影時は東京市長。立憲改進党の結成時に参加。大隈内閣の文相、法相を務める。渋沢栄一、第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績などの設立に関わった実業家。

30 『新日本』第二巻第一二号、一九一二年（大正元年）一二月一日掲載。

31 三吉明『山室軍平』、一八三頁～一八四頁。

32 立花雄一『評伝横山源之助』、創樹社、一九七九、一〇五頁。

33 第一二号（一八九八年五月一五日）「本社の片山潜及び横山源之助両氏の発起にて昨月廿七日午後七時よりきんくすれい館にて貧民研究会第一会開かれたり…」とある。

34 『横山源之助全集』第九巻、法政大学出版局、二〇〇六年、四九六頁。

35 立花雄一『評伝横山源之助』、八九頁。

36 『横山源之助全集』第九巻、四九二頁。

37 前田愛「獄舎のユートピア」『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、二〇〇六年、二三五頁。

38 Booth, William, *In Darkest England and the Way Out*, Biblio Bazaar, 2011, p.22.

39 前田愛「獄舎のユートピア」『都市空間のなかの文学』、二三五頁。

40 松原岩吾郎『最暗黒の東京』、岩波文庫、二〇〇九年、八八頁。

41 前掲書、一六頁。

42 『横山源之助全集』第七巻、法政大学出版局、二〇〇五年、二八四頁。